

東海の今川氏と山陰の今川氏——今川頼貞の基礎的考察——

谷 口 雄 太

一 はじめに——今川氏と東海・山陰——

戦国期の今川氏といえば、東海地域をまずは想起するだろう。駿河・遠江・三河・尾張などといった東海道の国々とのかわりである。たしかに、そうしたイメージは決して誤ってはいない。否、むしろ正しい事実認識であるとすらいえるだろう。けれども、当該期の同氏は、今を生きる私たちにとってはやや意外なことに、東海以外とのつながりについても主張していた節がある。

たとえば、天文十一年（一五四二）の「今川氏輝七年忌香語」には、今川氏代々の「歴史」が語られているのだが、そこには、南北朝期に今川範国が足利尊氏から「因・尾・遠・駿四州」を拝領したと見えている（『国立公文書館所蔵明叔録』『戦国遺文』今川氏編、二七〇三号）。また、天文十八年（一五四九）の「駿遠軍中衆矢文写」には、同じく今川氏の来歴について、今川範国がやはり足利尊氏から「駿河・遠江・尾張半国・但馬・因幡等数国」を頂戴したと見える（『島原松平文庫所蔵士林証文』『戦国遺文』今川氏編、九〇七号）。さらに、天正十五年（一五八

七）の「護国禪師雪斎遠諱香語写」にも、今川氏の「過去」について、右と同じように今川範国が「駿・遠・尾・但・因之五州」を獲得したとある（臨濟寺所蔵、『戦国遺文』今川氏編、二六三四号）。

このように、今川氏（南北朝期の今川範国）が、東海道諸国のみならず、山陰道諸国（但馬・因幡）をも統治していたことは、戦国期の同氏にとっては「事実」と考えられていたようである。

では、このような認識は、一体いかなる史実に由来するのであろうか。以下、検討してみよう。

二 先行研究の現状と課題

ここからは今川氏と山陰道のかかわりについて見ていくが、まず確認・指摘しておかなければならないことは、南北朝期に今川氏が山陰道の国々とつながりを持っていたことそのものは事実ということである。ただし、その今川氏とは、今川範国ではなく、今川頼貞という人物であった。

もちろん、これらはいずれも太田順三「観応擾乱期の但馬守護」(『模国文』五、一九七八年)や、長倉智恵雄「広島大学所蔵『今川家古文章写』の再検討」(同『戦国大名駿河今川氏の研究』東京堂出版、一九九五年、初出一九七九年)、佐藤進一『室町幕府守護制度の研究』下(東京大学出版会、一九八八年)などといった頗る稀少かつ貴重な先行研究や、『日高町史』資料編(日高町、一九八〇年)や『兵庫県史』二(兵庫県、一九七五年)のような関係する各自治体史類などでも触れられており、情報としては既知に属する。とはいえ、今川頼貞については専論そのものが極めて少なく、加えてそうした研究も、特定の古文書群からの分析(長倉智恵雄)や、各国守護の変遷という視点からの検討(佐藤進一)、当該自治体を基本範囲とする考察(各自治体史類)などに限られてしまい、一定の視角や一自治体を越えて、総体的に論じたものは、管見の限り、太田順三の論考しか見当たらない。そのため、氏のそれは今なお偉大な先行研究として高い意義を有しており、基本文献としての価値をいささかも失ってはいない。とはいえ、当該論文の発表からはすでに約半世紀近くが経過しており、その間に新たな史料の発見や、研究の進捗などがあり、かかる状況をふまえると、なお検証すべき事項もいくらか存在するというのもまた事実である。

それゆえ、以下、今川頼貞にかかる史実を改めて可能な限り確認したいと思う。なお、叙述に際し、軍記物語Ⅱ文学作品である『太平記』は、事実の認定には基本的に用いないものとする。

三 今川氏の系譜から

はじめに、今川頼貞とはどのような人物か。『尊卑分脈』によれば、今川氏の系図は次のようにある。関係する部分のみ掲出しよう。

【尊卑分脈】



これに対し、『土佐国蠹簡集』によれば、今川氏の系図は次のようにある。同じく関係する部分のみ掲出しよう。

【土佐国蠹簡集】



この二つの系図を見比べてみると、今川頼貞の父の名前が、前者では「頼基」、後者では「頼国」となっているとどこに違いはあるが、「頼基」・「頼国」いずれの官途も「式部大夫」となっている点では共通していることに気付く。この点、『系図纂要』では「頼基」Ⅱ「頼国」となっており、両者は同一人物と見てひとまず差し支えなからうかと思

う。『大日本史料』（六一二、四九三頁）も今川「頼基ハ即チ頼国ナリ、前後名ヲ異ニセルカ」と判断・結論しており、従うべきであろう。あわせて、今川頼国（頼基）が今川範国よりも「兄」の流れにあたることも注目に値するだろう。

この今川頼国（頼基）であるが、今川了俊（今川範国の子）が著した『難太平記』によると、「式部大輔入道」・「式部入道」・「号三郎頼国」^①と彼は、建武二年（一二三五）、中先代の乱鎮圧のため、「海道の大將」（東海道の大將）として足利尊氏とともに京都から東海道を経て鎌倉へ向かったと記されている。そしてその途中、遠江小夜中山や相模湯本などの難所で大いに活躍するも、相模川にて人馬もろとも戦死し、その死骸を後日今川範国が川底から拾ったと見えている。このことは、「足利尊氏関東下向宿次・合戦注文」^②にも、八月十二日、「小夜中山合戦」で「今河式部大夫入道」が「分取高名」とあること、八月十八日、「相模川合戦」で「今川式部大夫入道」が「御方打死」とあることからもおおむね裏付けることができる（『国立国会図書館所蔵文書』）。そして、「分取高名」では今川・佐々木・宇都宮・長井、「御方打死」では今川・小笠原・佐々木・二階堂・松本の順で「人数」（メンバー）として出てくることから、今川頼国（頼基）の戦場での活躍ぶりも想定される。『難太平記』が「あまりにすゝとき人」（非常に勇猛な人）と記したのも、川添昭二が指摘したように、うなずけるのではなからうか（『今川了俊』吉川弘文館、一九六四年）。

あわせて、ここで今川頼国（頼基）が「二条殿」（二条道平か）から

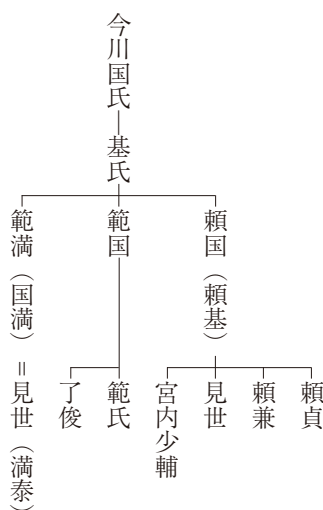
たまわった名馬の荒馬に乗っていたとあることも気になる（『難太平記』）。この点、父・今川基氏には多くの妹がいて「公家重縁」となったらしいこと（『難太平記』）、そして、子・今川頼貞が「建武安福殿女御侍始勾当」とあつて「安福殿」こと二条栄子（二条道平の娘で、後醍醐天皇の女御）に近侍したようであること（『尊卑分脈』・『系図纂要』）などとも関係するのではあるまいか。後醍醐天皇の建武政権下、京都にいて、武家のみならず、公家とも接点を持っていた今川氏の姿がうかがえるようである。

建武二年（一二三五）、今川頼国（頼基）が死去すると、その流れは今川頼貞に受け継がれる。このあたり、『難太平記』は今川頼国（頼基）の子どもたちとして①「駿河守〈于時掃部助〉頼貞」、②「参河守号式部大輔頼兼」、③「七郎見世」、④「宮内少輔」などを挙げつつも、「遁世してうせにき」とする。この点、『尊卑分脈』や『土佐国蠹簡集』は①②、『系図纂要』は①②③の名前を載せ、共通する部分としない部分とがあるが、いずれにしてもその後の流れは記されておらず、よく分からなくなってしまう。なお、『難太平記』は中先代の乱に際して、今川「刑部少輔殿範満」もまた討ち死にしたとする。彼は今川頼国（頼基）・今川範国兄弟の弟と見られ、『土佐国蠹簡集』は「範満」、『尊卑分脈』は「国満」、『系図纂要』は「範満」＝「国満」となっている。この今川範満（国満）には後継者がいなかったため、今川「頼兼舎弟七郎」（「七郎見世」）が養子となったが、「早世の間、跡絶し也」という（『難太平記』）。『土佐国蠹簡集』は今川範満（国満）の後継者に今川「満泰」を

載せ、「七郎」・「早世」とし、その子に僧の名前を載せるが、その後は見えない。大塚勲は「満泰は見世の改名」としたが、首肯できる（『今川一族の家系』羽衣出版、二〇一七年）。

以上、やや煩雑になったので、これまでに登場してきた今川一族の関係を次にまとめておこう。

【今川一族関係系図】



このように、今川一族（兄弟）の間で相互につながりあっていった様子がある。だが、今川頼国（頼基）と今川範満（国満）の系統は続かず、今川範国の系譜が今川基氏の流れを代表するかたちとなっている。これは、中先代の乱において今川頼国（頼基）と今川範満（国満）が戦死してしまったことが結果的に響いたと見られる。たしかに、『難太平記』には今川基氏が今川範国を後継者指名していたと記されているが、実際に、中先代の乱以前から今川範国は遠江守護を務めるなど

（『秋鹿文書』、兄弟のなかでの今川範国の位置付けは比較的高いようである。そして、今川範国は吉良貞義（足利一門）と「父子の契約」をして（『難太平記』）、「足利上総五郎入道」と呼ばれており（『多田院文書』、足利一門中屈指の名門・吉良氏とつながることができるなど、今川氏のなかでも高い地位にいたことは疑いない。とはいえ、それも今後のゆき次第でどうなるかわからず、今川頼国（頼基）の後継者も存在した以上、今川氏のなかで、今川範国の系統だけが唯一傑出していたわけではなかった。いずれにしても、中先代の乱で今川頼国（頼基）や今川範満（国満）が死去したことは大きく、『難太平記』によれば、これ以外にも複数の今川一族が中先代の乱では討ち死にしており、同乱は今川氏に多大な影響を与えたものと見られるだろう。

以上、今川頼貞の系譜を眺めてきた。すなわち、今川頼国（頼基）—頼貞は今川範国—範氏の「兄」の系統であること、建武政権期、在京し公武とのつながりを有したこと、しかし、中先代の乱鎮圧に際して今川頼国（頼基）は足利尊氏とともに東下し、戦死したこと、同乱は今川氏に大きな影響を与えたことなどを確認した。そのようななかで、今川頼貞は登場してくるのである。

四 建武動乱と今川頼貞

建武三年（一三三六）二月から三月、後醍醐天皇に敗れた足利尊氏は、京都から播磨室津を経て九州へと没落する。このとき、今川頼貞は足利尊氏と分かれ、山陽道・山陰道の中国地方へと派遣され、転戦し

た。三月には播磨の広峯氏らを組み入れ（「広峯文書」、「大將軍」として播磨周遍寺に在陣。その後、四月四日には北上して但馬へと移動し（「広峯文書」、同十四日にはそこから東へと進んで丹波夜久野に着陣（「三宝院文書」。同十七日には但馬の志津田氏に「凶徒退治」の軍勢催促をかけている（「広橋家文書」。五月三日には再び但馬へと戻り枚田河原で合戦。今度はまたそこから東へと進み、同五日・六日には丹波佐治山で軍事行動をとる。そして、同十六日には再び但馬に戻ってきて北上。円山川河口部、日本海への出入り口に位置する気比で交戦した（「広峯文書」。翌十七日には後醍醐天皇方も丹波に部隊を送り込もうとしている（「田所文書」。この間、今川頼貞の軍勢には周防氏・後藤氏ら播磨の人々に加え（「広峯文書」、院林氏など越中（北陸）の人々も加わっていたことが分かる（「三宝院文書」。その後、今川頼貞は、同二十五日には但馬で伊達氏の所職を安堵し（「南禅寺文書」、同月には広峯氏の軍忠状に一見（証判）を加えていることから（「広峯文書」、彼のもと、山陰方面での戦闘は一旦終結したものと見られる。

同時期、足利尊氏の軍勢は九州から京都を目指して進軍してきており、同二十五日にはすでに摂津湊川で楠木正成らを撃破していた。後醍醐天皇は同日、丹波路の防衛を命じ（「神護寺文書」、山陰道方面からの足利軍の侵入・攻撃を予想・警戒していた。果たして翌二十七日、後醍醐天皇が山門（比叡山延暦寺）へ動座すると、まずは丹波から今川頼貞と仁木頼章（足利一門）が丹波・但馬両国の「数千騎」という軍勢を率いて襲来・入京し、足利尊氏以下の上洛を迎えたのである（『梅松

論』）。このとき、彼らは錦旗（錦の御旗）を掲げていたという（『梅松論』）。仁木頼章は当時丹波で活動していたようで（「片山文書」・「後藤文書」、今川頼貞も但馬から丹波へは国境を越えて繰り返し攻め込んでいた以上、両者が山陰方面で連携・協力するというのもうなずけよう。

事実、山陰道の但馬・丹波・丹後三国の軍勢は国境をまたいで流動的に移動・結合することが可能であったようで、翌四年（一三三七。以下、年号は北朝のもので統一・表記する）五月から八月、北朝・足利軍の「大將軍」桃井盛義（足利一門）は、但馬の伊達氏を率いて丹波和久島↓丹波佐治山↓但馬田結庄↓但馬大高寺と転戦しており（「南禅寺文書」・「但馬伊達文書」・「伊達家文書」、同時期の六月、北朝・足利軍は「但馬・丹波凶徒」（南朝勢力）を掃討すべく、小俣来全（足利一門）も出撃させる（『新編会津風土記』四十九陸奥耶麻郡之二「成就院古文書」。かかる一連の動きに対して七月、「但馬・丹波・丹後三箇国凶徒等」つまり南朝勢力は丹後加悦へと攻め寄せ（「吉川家文書」、八月から十一月、小俣来全が「丹後国凶徒」（南朝勢力）を攻撃している（「吉川家文書」。また、この頃、南朝勢力の祇園前執行頭詮らは丹波波々伯部保↓丹波高山寺↓丹後成相寺↓丹波と国境を越え転戦し、南朝の論旨を諸方にばらまいていたという（祇園宝寿院所蔵「古文書録」・「建内文書」。このように、南朝勢力も北朝・足利軍もいわゆる「三丹」（丹波・丹後・但馬）の国境をまたにかけて広域的に活動していた様子がうかがえ、当該地域の連動性・一体性が看取されることは注目に値するだろう。このことは、暦応元年（一三三八）から翌二年（一三三九）にかけ

て京都↓因幡↓但馬↓丹波↓但馬↓京都と移動・転戦し、因幡守護も務めた北朝・足利軍の「大將軍」吉良貞家（足利一門）の事例からも確認され、興味深い（『新編西尾市史』通史編一原始・古代・中世、西尾市、二〇二二年、谷口雄太「吉良貞義・満義・貞家」亀田俊和・杉山一弥編『南北朝武將列伝』北朝編、戎光祥出版、二〇二一年、谷口雄太「足利將軍と御三家」吉川弘文館、二〇二二年、谷口雄太「足利氏と但馬国」『但馬史研究』四六、二〇二三年）。

入洛・合流した足利氏の軍勢は、建武三年（一二三六）六月五日から後醍醐天皇のよった山門への攻撃を開始し、今川頼貞も播磨の広峯氏、但馬の伊達氏、越中の院林氏らの諸軍勢を率いて山門東坂本へと攻め寄せた。翌六日には三井寺上や浜道で、翌七日には山手堀緒（ほりばた）で戦い、同二十日には山手西尾や山門無動寺（山門東塔）まで攻め上って散々に戦って、敵も討ち捕らえている（「広峯文書」・「但馬伊達文書」・「三宝院文書」）。けれども、同三十日、後醍醐天皇の軍勢も反攻攻勢に出て京中で激戦となった。しかし、今川頼貞は賀茂河原合戦では「大將」として出陣して、但馬の伊達氏を率いて、名和長年の一族を討ち取って（「伊達家文書」・「但馬伊達文書」）、京都南部・竹田方面でもまた「大將」として出撃して、丹後・但馬の軍勢を引き連れて敵を撃破したという（『梅松論』）。なお、賀茂河原合戦では今川頼貞の「御内候人」として「大野源太」という人物が見え「御実検」をしており（「但馬伊達文書」）、別の史料には「大野源太父子」ともあることから（「但馬伊達文書」）、彼の側近に大野氏なる武士がいたことが分かる。今川頼



【参考地図】山陰道（錦織勤『古代中世の因伯の交通』（鳥取県、2013年）27頁より転載）

貞関係史料は少ないなか、その「御内」が分かるのは貴重である。つまり、今川頼貞の軍勢は彼の近臣たちと各国の人々（但馬・丹波・丹後・播磨・越中ほか）から構成されていたものと思しい。

六月下旬から七月にかけて、今川頼貞は軍忠状に「見（証判）を加えており（「但馬伊達文書」・「広峯文書」・「伊達家文書」）、このあたりで彼の京都での戦闘は一旦終結したものと見られる。その後、九月には近江への出撃を命じられ（「朽木古文書」）、後醍醐天皇方の弱体化に寄与した。なお、今川頼貞は建武三年（一三三六）九月二十七日には「掃部助」であったが（「朽木古文書」、同五年（一三三八）四月三日には「駿河守」となっている（「広峯文書」）。功績により、この間に掃部助から駿河守へと官途を改めたものと見られるだろう。この点、今川頼貞が「于時掃部助」であったとき、播磨清水寺に対して「御書下并卷数御返事」の「二通」を発給したというのも、これまで右に述べてきた建武動乱の時期のできごとであったものと考えられる（「清水寺文書」。あるいは、今川頼貞が播磨にいたことが確実な建武三年（一三三六）三月頃のことであろうか。同年（一三三六）三月十二日、播磨清水寺に対して出された「御教書」（内容的には「武運之長久」を願う祈祷依頼）というものが、それと深くかかわっていたのではないだろうか（「清水寺文書」。たしかにこの「御教書」は足利尊氏のものであった可能性もある（『社町史』一本編一、加東市、二〇〇七年、河村昭一『中世の播磨と清水寺』戎光祥出版、二〇一三年）。けれども、三月時点で彼は播磨から遠く離れた九州にいて、そして、「御教書」が大将の発給文書でも

あったこと（水野圭士「南北朝前期「大將軍」上野頼兼の位置付け」『日本歴史』七八九、二〇一四年）などからすると、この「御教書」は「大將軍」今川頼貞の祈祷依頼だった可能性もあるのではないか。

こうした一連の勲功の賞として、建武四年（一三三七）八月、今川頼貞は越後・越中・若狭・和泉といった北陸や畿内の国々の所職（ただし、恩賞の地が山陰の「三丹」＝丹波・丹後・但馬などではなかったことはいささか気になるが）を足利尊氏から拝領している（「今川家古文章写」）。

以上、建武動乱期の今川頼貞を眺めてきた。すなわち、彼は足利尊氏の九州没落・京都再上洛の間、足利尊氏と分かれ、播磨から但馬↓丹波↓但馬↓丹波↓但馬と、国境をまたいで戦う「大將軍」として活躍したこと、隣国・丹波の仁木頼章とともに山陰道の国々を押さえることに尽力し、彼とともにいち早く丹波路から入京したこと、丹波・丹後・但馬の「三丹」はつながりが深かったこと、山門によった後醍醐天皇との戦いでも貢献したこと、今川頼貞の軍勢には御内と外様（但馬・丹波・丹後・播磨・越中国人ら）がいたことなどを指摘した。国境を越え、中国や北国などの多彩な地域勢力を組み込んで、長距離の移動を行うのではないだろうか。そして、畿内に近い山陰道諸国―丹波・但馬（加えて丹後もか）―を押さえ込んだ今川頼貞・仁木頼章の功績は、やはり同じく畿内に近い山陽道諸国―播磨・備前―を押さえ切った石橋和義（足利一門）・赤松円心の巨大な功績（谷口雄太「石橋和義」亀田俊和・杉山

一弥編『南北朝武將列伝』北朝編、戎光祥出版、二〇二二年）と比べてみても、決して劣るものではないであろう。山陰道の動向に一層の注目が必要だろう。

五 観応擾乱と今川頼貞

建武三年（一三三六）の中央での戦いの後、今川頼貞の政治的な動向が再びうかがえるのは、暦応元年（一三三八）九月のことである（「神戸小野寺文書」）。この頃以降、彼は丹後守護として見えている（「長福寺文書」・「桂文書」）。なお、今川頼貞の官途について、暦応元年（一三三八）九月には「駿河守」だったが（「神戸小野寺文書」）、翌二年（一三三九）以降には「駿河前司」・「前駿河守」となっている（「長福寺文書」・「三宝山院文書」・「桂文書」）。比較的短期間で彼は「前」となったことがうかがえよう。また、彼の花押についても眺めてみると、暦応三年（一三三〇）五月二十七日から十月二十三日までの間にその形状を変えていたようである（「三宝山院文書」・「桂文書」）。なお、十月二十三日付け「桂文書」に「今川頼貞請文につき、①今川頼貞の花押の形状から暦応三年五月二十七日以降であること②三宝山院文書」、②暦応四年十月四日には丹後守護は山名時氏（足利一門）に交替していること（「西大寺文書」）から、暦応三年に比定される。この点、『花押かがみ』（六、二四九頁）もまた本文書につき、暦応三年かとしており、従うべきであろう。

その後、今川頼貞の政治的動向が再度うかがえるようになるのは、貞

和四年（一三四八）二月のことである（「広橋家文書」）。今川頼貞は但馬大高山（大高寺・大香寺・大光寺などともある）に与同する南朝勢力のリストを室町幕府へ提出している。彼は再び但馬に戻ってきたのである。そして、翌五年（一三四九）正月から四月にかけ、今川頼貞は明確に但馬守護として見えている（「広橋家文書」・「今川家古文書写」）。ここで注目したい史料（文書）が、貞和四年（一三四八）十二月二十三日付け今川頼貞寄進状である（「清水寺文書」）。これは、今川頼貞が播磨清水寺に対して但馬下鶴井庄の所職を寄進したもののだが、そこでは「両殿安隠」（両殿安穩）が願われている。観応擾乱をめぐる研究でもあまり注目されていないのではないかと思われるので、次に掲げる。

奉寄附 播磨国清水寺

但馬国下鶴井公文職事

右、為天長地久・両殿安隠・現当悉地、所奉寄附当寺也、仍寄進之状如件、

貞和四年十二月廿三日

前駿河守源朝臣（花押）

同寺は、先に見たように、今川頼貞と関係があったのみならず、足利氏ともつながりのある、「丹州・播州・摂州三ヶ国堺」に位置する霊場であった（「清水寺文書」）。そして、ここに見える「両殿」とは足利尊氏・足利直義兄弟のことであり、両者の不穏な関係・様子がうかがえる

ものとなっている。こうした文言（「両殿御安穩」）は、たとえば翌五年（二三四九）十月十八日付け足利直冬寄進状写にも登場する（「阿蘇家文書」）。すなわち、足利の分裂＝観応擾乱の勃発である。

今川頼貞が務めた但馬守護は、貞和五年（二三四九）十二月には上杉朝房へと交替し、それが観応元年（二三五〇）四月頃まで続く（「広橋家文書」）。しかし、同年（二三五〇）七月には再び今川頼貞が同国守護となっている（「今川家古文章写」）。同時期に「但馬国勢」による隣国・丹後田辺攻めが期待されている（「西大寺文書」）。十月から十一月、但馬では彼の遵行命令を受けて、勝田・野呂両氏が使節（両使）として動いている（「天龍寺文書」）。彼らの実名は「貞景」・「信貞」となっており、「貞」の一字から、今川頼貞の被官か何かであろうか。なお、九月には今川頼貞が隣国・因幡守護を務めていたらしいこともうかがえる（「新興寺文書」）。この頃、幕府内部では、足利直義―足利直冬のラインではなく、足利尊氏―足利義詮―高師直のラインが主導権を握っており、そのような状況のもとで、但馬・因幡の山陰道両国の守護を務めるなど、今川頼貞は観応擾乱において、後者（足利尊氏・足利義詮・高師直）と比較的近い関係にあったものと見られる。この点、古態をとどめるとされる西源院本『太平記』でも彼は執事（高師直）の方に付いた人々（メンバー）として描かれている（ちなみに、神宮徴古館本『太平記』では今川頼貞の記載なし）。

観応二年（一三五二）正月、今川頼貞は足利尊氏から越前・但馬・因幡といった北陸や山陰の国々の所職を与えられた（「今川家古文章写」）。

東海の今川氏と山陰の今川氏―今川頼貞の基礎的考察―

いずれも勲功の賞で、従来の替として付与されたものであった。但馬では太田庄が見えている。また、同月、今川頼貞は「但馬国軍勢」と「手者」に対し、恩賞として但馬国内の闕所地を分け与えるよう、足利尊氏から命じられている（「今川家古文章写」）。前節でも見たとおり、今川頼貞の軍事力が「手者」（近臣）と「但馬国軍勢」（地域の勢力）から構成されていたことが再確認できるという点でも本史料は注目されるところである。

だが、同年（一三五二）三月には上野頼兼（足利一門）が但馬守護として見えている（「広橋家文書」）。但馬守護が今川頼貞（足利尊氏・足利義詮・高師直に近い）から上野頼兼（足利直義・足利直冬に近い）へと変更された理由は、この間（二月）に勃発した高一族の族滅においてない。上野頼兼はこのとき、隣国・丹後守護も兼任していた（「金剛院文書」・「三宝院文書」・「桂文書」）。

しかし、その後半年も経たないうちに、今度は足利直義に味方する人々が追い詰められていく。そして七月、足利尊氏に味方する人々は続々と京を離れたが、そのなかに今川頼貞の姿も見えている（『観応二年日次記』観応二年七月二十一日条）。これを受けて足利直義らも北国に向かう。上野頼兼も彼に同道したけれども（『観応二年日次記』観応二年七月三十日条）、八月、彼は足利義詮から名指しで追討の対象とされ（「本郷文書」）、九月、丹後で戦死した（「園太暦」観応二年九月十二日条）。上野頼兼の死去した場所は但馬であったともいい（『尊卑分脈』）、当時、但馬の「悪党」が丹後に侵入するとの噂（風聞）も飛び

交っていた(『園太暦』観応二年九月十二日条)。但馬・丹後はいずれも上野頼兼の守護分国であったが、今川頼貞と関係の深い国々でもあった。但馬から丹後に乱入しようとしたという「悪党」とは今川頼貞の与党だったのであろうか。他方、こうした北朝・足利軍の内訌・混乱にあって、同月、南朝勢力も丹後攻撃を行っており(『園太暦』観応二年九月十二日条)、但馬の「悪党」とは彼ら(南朝勢力)のことだったのかもしれない。

いずれにしても、上野頼兼が没落した観応二年(一三五二)八月、今川頼貞は但馬守護に復帰した(『天龍寺文書』)。しかし、十一月、彼は丹波との国境に近い但馬磯部で南朝勢力と戦って、追い落とされている(『出石神社文書』)。南朝勢力には江田氏(足利一門)もいたが、同氏はこの頃、丹波の「大將軍」として見えており(『仁和寺文書』)、国境を越え但馬にやってきたことが分かる。その後、翌三年(一三五三)五月十九日、但馬太田庄内の所職を山城石清水八幡宮へ寄進していることが確認される(『菊大路家文書』)。これはこの直前の同十一日、石清水八幡宮のある八幡・男山に立て籠もっていた南朝勢力を、幕府軍が陥落させていたことと関係するであろう。

しかし、今川頼貞は但馬守護としては見えなくなり、翌文和二年(一三五三)四月には山城にいたようで、同国の諸司領を兵糧料所として押領している(『園太暦』文和二年四月十二日条・同二十一日条)。彼は山城国内十ヶ所の本所領の半済を宛て行われていたとされる(『師守記』貞治六年六月十八日条)。この頃、京都では、関東に下向した足利尊氏

にかわって、足利義詮が幕政を主導していたが、他方、足利直冬が九州から攻め上ってくるとの噂が都に流れるなど(『園太暦』文和二年二月三十日条・同三月二十四日条)、反幕府方の勢が増してきており、今川頼貞の動きはそれへの対応だったのだろう。いずれにしても当時、但馬のみならず、丹波・丹後・因幡などほかの山陰道諸国の守護としても見えず、この頃、彼はすべての職を失ったものと考えられよう。

以上、観応擾乱期の今川頼貞を眺めてきた。すなわち、但馬守護を務め、丹後守護や因幡守護も担ったこと、しかし、足利一族の分裂戦争である観応擾乱では足利尊氏―足利義詮―高師直に近い立場から、守護の交替が繰り返されたこと、丹波からの南朝勢力による攻撃を受け没落したこと、以後、但馬守護としては確認できず、山城で見えることなどを指摘した。かつて小川信は、観応擾乱を乗り切れず「衰退」してしまつた足利一門として、吉良・石塔・桃井・上野各氏を掲げ、いずれも足利直義―足利直冬に近い立場だったがゆえとした(『足利一門守護発展史の研究』吉川弘文館、一九八〇年)。ただ、こう見ると、足利尊氏―足利義詮―高師直に近い立場であったにもかかわらず衰滅した今川頼貞は、なかなか稀な事例だったのではないかと思われてならない。

六 その後の今川頼貞

文和三年(一三五四)三月、今川頼貞は勲功の賞として拝領していた所々の所領を「わたの」に譲った(『今川家古文書』)。これを受けて九月、次の文書が出された(『松雲公採集遺編類纂』一五〇)。本文書は

すでに『静岡県史』通史編二中世（静岡県、一九九七年）で指摘されている極めて重要な史料だが、翻刻がなされておらず、ほとんど知られていないようなので、それを示す。

亡父駿河守頼貞遺跡所領等事、任讓状之旨、今河和王丸相統領掌、不可有相違之状如件、

文和三年九月廿一日

尊氏判

これは、足利尊氏が今川和王丸に対して、今川頼貞の遺跡所領を安堵した御判御教書であり、「讓状」とは本節冒頭で述べた三月のものを指すが、これらから「わたの」Ⅱ「今河和王丸」ということが分かる。そして、「亡父」ともあるから、今川頼貞の子が今川和王丸であり、今川頼貞はすでに死去していたことも判明する。三月に讓状をしたためた後、半年も経たないうちに彼は亡くなったいたのである。『土佐国臺簡集』によれば、今川頼貞は晩年、「丹波国まなんちやう二居住」とあり、丹波真南条に住んでいたというが、先述したように、山城での活動もあって、定かではない。なお、彼は従兄弟・今川範氏と同じ世代のはずだが、叔父・今川範国と同じ時期に活動していることからすると、その生年は十四世紀初頃かと思われる、死亡時点ではおよそ四十歳から五十歳くらいだっただろうか。その子・今川和王丸はまだ元服前であり、今川頼国（頼基）——今川頼貞と続く今川氏の流れは、足利尊氏から安堵を

東海の今川氏と山陰の今川氏——今川頼貞の基礎的考察——

受けたとはいえ、依然反幕府方が強力に存在する十四世紀中葉という状況下において、非常に困難な舵取りが予想されるところであるが、事実、この後、今川和王丸の姿はうかがえなくなってしまう、系図にも見えない。この点、『系図纂要』には今川頼貞の箇所「依無子讓与範氏」とあって、彼は後継者がいなかったため従兄弟・今川範氏に譲ったとあり、『今川家譜』や『今川記』などにも同様の記述があるが、今川和王丸の存在からすると、これもおそらく事実ではないであろう。なお、『延文元』年（一三五六）の異筆の付年号を有し、但馬の状況をやりとりする、十二月二十日付け但馬の安田氏宛て今川頼貞書状（「垣谷文書」）も、今川頼貞の死去が文和三年（一三五四）のことであったとすれば、再検討が必要だろう。この点、花押の形状から、暦応三年（一三四〇）以降であり、彼の逝去は文和三年（一三五四）三月から九月までゆえ、本書状は文和二年（一三五三）以前のものと考えられよう。

七 おわりに——山陰と東海、二つの今川氏——

以上、今川頼貞の事績について整理・検討してきた。具体的な事実については各節でまとめてあるので繰り返すことはしないが、今後も史料のさらなる博搜によって、基礎的な史実の確定はまだ詰められるものと思われる。最後に、いくつか論点・課題を提起して擱筆することにした。

一つ目は、なぜ今川頼貞とその系統は生き残らなかったのか、という点である。これについて、観応擾乱期、但馬内外での南朝勢力の攻勢や

争乱の激化が大きかったものと見られようが、その後、彼が復活できなかったのは、今川頼貞の軍事的能力の欠如によるというわけではなからう。そのことは、建武動乱期、彼が但馬内外をまとめた功績からも明らかだろう。この点、『兵庫県史』二（兵庫県、一九七五年）や宿南保『但馬の中世史』（神戸新聞総合出版センター、二〇〇二年）は、建武動乱期、今川頼貞の成功につき、「大將軍」として大きな権限を有していた点を指摘する。実際、当該期、足利尊氏の分身として各地に派遣された「大將軍」（大將）は、彼に限らず、同様の権限を持っていたとされる（漆原徹『中世軍忠状とその世界』吉川弘文館、一九九八年、花田卓司「南北朝期室町幕府における守護・大將の所領給付権限」『古文書研究』六六、二〇〇八年）。要するに、建武動乱期、今川頼貞は但馬・丹波・丹後・因幡など（東部）山陰道方面の「大將軍」として、国境を越えて戦う権限を与えられ、その力量も有した。当該地域の一体性・流動性からしても、効果的な戦い方であったと考えられよう。しかし、観応擾乱期、彼は、守護としては見えるけれども、「大將軍」（大將）としては見えない。つまり、国境をまたいで広域的に戦う権限を失っているのである。当該地域の南朝勢力は「大將軍」江田氏や大高山（三丹国境付近に存在）のように、一国単位・規模で動いてはならず、北朝・足利軍としてもそれに即応する必要が本来はあった。それゆえに、一国守護では（仮に一時的に二国を兼ねていたとしても）対応が難しいことがあったのではないか。但馬・丹波・丹後・因幡＝東部山陰道地域統治の困難さでもある。加えて、今川頼貞の後継者が育たなかったという点も、彼

の系統が衰滅した要素の一つだろう。

二つ目は、今述べてきた点ともかわるが、すなわち、道＝交通路としての東部山陰道の実態はどのようなになっていたのか、という点である。山陰道は、山陽道や東海道などに比べて、研究が遅れているように感じられる。とりわけ中世の山陰道は、古代や近世のそれに比して、分らない点が多いようである（石田善人「中世の山陰道」『山陰道』兵庫県教育委員会、一九九三年）。とくに、旧国が今の都道府県で分断されてしまうと、復元作業が困難化するという問題点もある。また、陸上交通よりも、海上交通の方が、現状研究が進んでいるようにも見受けられる。錦織勲『古代中世の因伯の交通』（鳥取県、二〇一三年）は因幡・伯耆（鳥取県）を中心に山陰道の交通について論じたが、このような基礎的な作業の積み重ねが、今後さらに重要となってくるだろう。この点、錦織は、山陰の交通の特徴として、中国山地越えの道について指摘し、山陰道としてのヨコの道のみならず、山陰―山陽を結ぶタテの道についても論じているが、たしかに今川頼貞の場合（建武三年三月―四月）も播磨から但馬へとタテに抜けている。今後、軍忠状の分析などを通して、中世山陰道地域の交通網を復元していく作業は、残された課題となっているといえよう。

三つ目は、東海の今川氏と山陰の今川氏をつないだものは何か、という点である。本稿の冒頭でも述べたように、戦国期の今川氏は、山陰とのつながりも主張していた。それは本稿で述べた南北朝期の今川頼貞の活動のことであり、戦国期の今川氏（今川範国の系統）と直接はつなが

らないはずである。にもかかわらず、『系図纂要』や『今川家譜』・『今

川記』などは両者をつなげて、山陰の今川氏を東海の今川氏が継承したとしているのである。そのような「記憶」（捏造といってしまうえばそれまでだろうが）はどのようにして生まれたのか、なぜわざわざ南北朝期山陰今川氏の「記憶」を戦国期東海今川氏がよみがえらせたのか。戦国期東海今川氏の「宣伝工作」と関係があるものと想定されるところだが（谷口雄太「今川氏と「足利一門」「吉良一門」」大石泰史編『今川氏年表』高志書院、二〇一七年、清水敏之「駿河今川氏の「天下一名字」は史実か」大石泰史編『今川氏研究の最前線』洋泉社、二〇一七年）、いずれにしても南北朝期、今川頼貞の山陰今川氏と、今川範国の東海今川氏は、いずれも劣らぬ活動を展開しており、山陰と東海で「二つの今川氏」（今川の両翼）として発展していく可能性は十分にあった。そのような確かな事実が、室町期を通して継承されていたことが、戦国期の記憶につながったことは間違いないであろう。今川氏研究は、戦国期の東海が中心であり、それ以外の時代や地域とのつながりは研究者の視野から外れやすいこと、かつて指摘したことがある（谷口雄太「名和慈冬」は存在したか」日本史料研究会編『日本史のまめまめしい知識』一、岩田書院、二〇一六年）。本稿もまた南北朝期と戦国期、山陰と東海をまたぐ話であった。今川氏と九州のつながり、実態や記憶なども含めて、今後も限定された視角（死角）を超えて、多様な視点から探究がなされることを期待したい。

【付記】本研究はJSPS 科研費JP19K13328およびJP22K13196の助成

東海の今川氏と山陰の今川氏——今川頼貞の基礎的考察——

を受けたものである。

【引用文献】（副題は省略）

- 石田善人「中世の山陰道」（『山陰道』兵庫県教育委員会、一九九三年）
漆原徹「中世軍忠状とその世界」（吉川弘文館、一九九八年）
太田順三「観応擾乱期の但馬守護」（『相模国文』五、一九七八年）
大塚勲「今川一族の家系」（羽衣出版、二〇一七年）
小川信「足利一門守護発展史の研究」（吉川弘文館、一九八〇年）
川添昭二「今川了俊」（吉川弘文館、一九六四年）
河村昭一「中世の播磨と清水寺」（戎光祥出版、二〇一三年）
佐藤進一「室町幕府守護制度の研究」下（東京大学出版会、一九八八年）
清水敏之「駿河今川氏の「天下一名字」は史実か」（大石泰史編『今川氏研究の最前線』洋泉社、二〇一七年）
宿南保「但馬の中世史」（神戸新聞総合出版センター、二〇〇二年）
谷口雄太「名和慈冬」は存在したか」（日本史料研究会編『日本史のまめまめしい知識』一、岩田書院、二〇一六年）
谷口雄太「今川氏と「足利一門」「吉良一門」」（大石泰史編『今川氏年表』高志書院、二〇一七年）
谷口雄太「石橋和義」（亀田俊和・杉山一弥編『南北朝武将列伝』北朝編、戎光祥出版、二〇二二年）
谷口雄太「吉良貞義・満義・貞家」（亀田俊和・杉山一弥編『南北朝武将列伝』北朝編、戎光祥出版、二〇二二年）
谷口雄太「足利將軍と御三家」（吉川弘文館、二〇二二年）
谷口雄太「足利氏と但馬国」（『但馬史研究』四六、二〇二三年）
長倉智恵雄「広島大学所蔵「今川家古文書写」の再検討」（同『戦国大名駿河今川

氏の研究』東京堂出版、一九九五年、初出一九七九年)

錦織勤『古代中世の因伯の交通』(鳥取県、二〇一三年)

花田卓司「南北朝期室町幕府における守護・大将の所領給付権限」(『古文書研究』

六六、二〇〇八年)

水野圭士「南北朝前期「大將軍」上野頼兼の位置付け」(『日本歴史』七八九、二〇一四年)

『静岡県史』通史編二中世(静岡県、一九九七年、山家浩樹執筆分)

『新編西尾市史』通史編一原始・古代・中世(西尾市、二〇二二年、谷口雄太執筆分)

『兵庫県史』二(兵庫県、一九七五年、永島福太郎執筆分)

『日高町史』資料編(日高町、一九八〇年、太田順三執筆分)

『杜町史』一本編一(加東市、二〇〇七年、河村昭一執筆分)